
変態道中夢語り

城川 一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態道中夢語り

【Nコード】

N3976I

【作者名】

城川 一二三

【あらすじ】

変態で紳士の友人、阿武野に振り回される青年の周りにはなぜかいつも異常が起こる。
そんな彼と彼の友人たちのファンタジーなお話。

プロローグ（前書き）

ああ、また發揮してしまいました。続きを書くより他の物を書いてしまふという駄目っぷり。しかも変態的。今回は正直変態を書きたかっただけです。

そんな僕を貶してください。そして広い心で許してください。

あ、因みにエロスはダメ、ゼツタイという人は、Uターン推奨です。

ブローグ

「ひとえに美少女といえども様々なタイプが存在し、また人それぞれによつて美少女の物差しは違う。たとえば僕は、活発で運動好きの健康的な子が好みであり、髪はショートからセミロングまでの長さがベストだと考えている。健康的な小麦色の肌、鍛えられた太腿、少し汗ばんだ腋、そして時折見える臍の絶妙なチラリズム。はからずとも悩ましげに醸し出されるエロティシズムに僕はリビドーを感じずには居られない・・・あ、スパッツも有りだと思つぞ。まあつまりスポーツ少女万歳という事だ」

「お前は早朝から何を言つてる」

「何つて、分からないのか」

現在の時刻は朝の七時。教室には俺と目の前にいる自称紳士の阿^あ
武野^{ぶの まるひさ} 眞流尚しか居ない。

そんなひっそりとした空間の中、何を思つたのか自分の性癖をカミングアウトである。意味が分からない。と言うか俺にしてみれば解る解らないでは無く解りたくない話だ。この男に羞恥心という物は無いのだろうか、と今更ながら思う。

「僕の性癖と自論を少々だ・・・聞こえなかったならもう一度言つてもいいぞ？」

「結構です。というかお前俺に言つてたのか」

そう俺が軽く驚いたようなそぶりを見せると、アブノはびしりと

擬音が付きそうな勢いで俺を指さし謎のポーズを取って、口を開いた。

「おお嘆かわしい。もう僕との素晴らしい邂逅を忘れたというのか輩よ」

「何処が素晴らしい邂逅だ。俺には犬の糞を踏んだようにしか感じられなかったわ！・・・と言うか俺をお前と同類にするなっ！」

思い出すのも憚れる。そう言えるほどにこいつとの出会いは最悪だった。いや、出会い方は良く有りそうな普通の出会いだった。こいつに出会った事が最悪だったのだ。そして俺の失態である。

「ハハハ、そう照れるなジョンよ。男のツンデレなど誰も喜ばないぞ」

「やかましいっ！・・・って俺の名前はジョンじゃねえっ！」

こいつとの出会いは入学式まで遡る。そこで俺は、運命的とも言えなくもない出会いをこいつ果たした。いや果たしてしまったのだ。

プロローグ（後書き）

短いです。きもいです。御免なさい。

絡新婦 一（前書き）

駄文です。そして短い。おかしいですね、短いですよ。

次こそはもっと長く書けるように精進します。広い心で許してください。

絡新婦 一

鬼。

それは日本人であるなら誰でも知っているであろう魑魅魍魎の代
表格である存在だ。

「ふうん。んで？ 探しに行くのか、その」

桃太郎しかり、一寸法師しかり、泣いた赤おにしかり。童話や伝
説、諺と言った形で現代まで語り継がれている、恐怖すべき、禁忌
すべき、友愛すべき、壁を隔てた幻想側の住人。異形の化け物。

「ああ、当たり前だ。噂に聞くとところ相当な美少女らしいぞ」

「お前の行動原理はそれしか無いのか・・・そんなんで大丈夫なの
か？ 相手は」

そして血を吸う鬼 吸血鬼。

「問題は無い。むしろ望む所だ。実は多少被吸血願望があつてな・・・
多少だぞ？」

「フォローになつて無いから。願望がある時点で十分だ」

西洋の鬼と言えばまず浮かぶのがそれだろう。

異常な怪力に、体を蝙蝠や霧に変える変身能力。噛んだ相手を眷族に変える増殖性に、魅了の瞳。弱点と言えば太陽の光や流水、銀の杭やにんにくなど。

強力で恐ろしい半面様々な弱点が存在する比較的人に似た、夜の住人。モンスターと言うにはおこがましいほど高い知性を持つ人ならざる者。

「あ、そう言えば場所は分かってんのか？」

「ああ、勿論だ。吸血鬼を見たという美少女に案内してもらえろぞ、喜べ。フッフ、透き通る様な白く美しい肌に、艶やかな紅い唇。そして鴉の濡れ羽、緑の黒髪と表現出来得るあのアジアンビューティな長髪。ピンと伸ばされた背筋と挑発的かつ高圧的にこちらを見る黒い瞳に、思わず僕は地面に這い蹲って上履きを舐めそうだったよ」

「・・・そうですか」

どこの女王様だそれは。そしてマジな恍惚の表情をするな。リアクションが取りずらいだろうが。

周りではこいつの顔を見た女子どもがこそそと話してはにやにやとしている。

お世辞ではなくこいつの顔はかなり良い。しかも普段はこいつの本性を知っている奴以外の前では猫を被っているのだ。

運動神経が良く、頭が良い上器量も良い。何処の完璧超人なのだろうかと思わず心の中でつつこんでしまう、本性を知らない奴の前でだけだが。

「ああ、それでこの子が話の」

そう言っただの後ろを指した。

そこにはなるほど、アブノ好みの美少女、いや美女と言えよう大人びた女生徒が一人、挑発的かつ高圧的な視線で俺を見ていた。

「よるちか みかと夜近 美門。よろしくね」

「っ・・・あ、ああ、俺は」

「こいつはジョン。犬の様に使ってやってくれ。先に言っておくとコイツは真正のマゾなんだ」

俺の自己紹介を遮り、しれつとした態度で嘘を吐くアブノ。
なるほど、と頷く夜近を見た瞬間、俺は何かが終わった様な気がした。

「ジョン、お手」

「本当の犬の様に扱おうとするな！」

「あら？ アブノ君は貴方を犬の様に、と」

「例えだ例え！ アンタ絶対態とだろ！」

「だって、私には貴方が犬にしか見えないもの」

「嘘吐けえ！ 何処をどう見たら俺が犬に見えるんだ！」

「ねえアブノ君。この犬キャンキャンと喧しいわ」

「慣れてくれ。ジョンは何かと煩いからな。まあこいつはツンデレだから」

ちょっと待てと言いたい。なぜ俺を二人して犬扱いしているのだろ。と言つか俺はこんなキャラだっただろ。うか。

と言つか吸血鬼探しに行かないのか。まあ俺にしてみればこのままこの話が無くなってくれた方が何かと面倒な事が起きなさそうで助かるのだが。

あとツンデレ言っな。

「ふふ、確かに言葉に反して尻尾振ってるわね」

「振ってねえ！ と言つか尻尾なんて生えてねえよっ！ あれが、馬鹿には見えないとかいうそういうノリなのか？」

「あら、貴方結構メルヘンなのね？ そんな尻尾有るわけ無いじゃない。それこそ言葉の綾よ」

「もうやだこの人。言葉に悪意しか感じない」

「私の趣味は人の穴を穿つ事と、特定の人を悪意に満ちた言葉で滅多打ちにする事よ。良かったわね、私のお眼鏡に適って」

そう勝ち誇る様に言つと、三割増し程サディスティックに笑みを深めた。

恐らく夜近の目には面白そうな玩具か、美味しそうな獲物が写っているに違いない。

と言うかお前は何様だ。

「助けてアブえもん。夜近さんが虐めるよ」

「あら、ならさしずめ貴方はのび犬ね」

「何うまい事言ってたんだ！ 確かにのび太君は名前をよく間違えるけど・・・ってもう良いだろ、そろそろ話進めろよ。と言うか進めてください」

「うふふ、貴方って実は楽しい人だったのね。てつきり没個性的な大衆の中の一人なのかと思っていたわ。今私の中の貴方の株がうなぎのぼりよ。まあ元が低すぎるから大した物じゃ無いけれど」

そう褒めているのか貶しているのか微妙な評価を下した後、ついてらっしゃい、と踵を返す夜近。

どうやらこいつは相当なナルシストのようだ。でなけりや余程の自信家か。まあどちらにせよ大差は無い。どちらにせよ厄介で面倒な人種なのだろう。

どうやら俺はアブノに次ぐ特異点に出会ってしまったようだ。

そんな徒な事を考えながら夜近の後ろ姿を見ていて気付いた事は、案外に悪く無いと思ってしまっている自分が居るという事だけだった。

絡新婦 一（後書き）

会話が長すぎますね。

もっと地の文が書けるよう精進します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3976i/>

変態道中夢語り

2010年10月28日00時45分発行